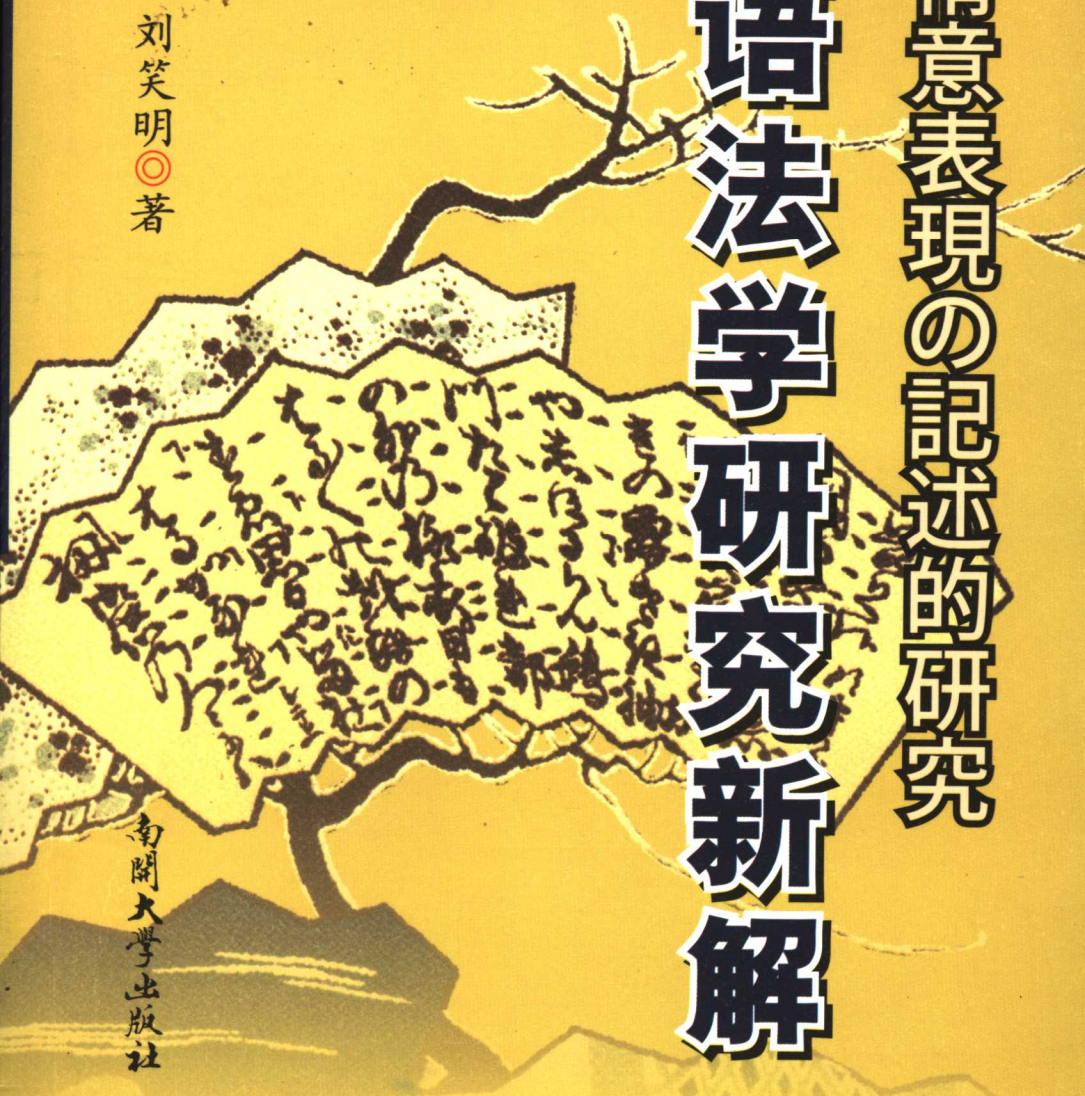


日本語情意表現の記述的研究

# 日语语法研究新解

刘笑明◎著

南开大学出版社



# 日语语法学研究新解

日本語情意表現の記述的研究

刘笑明 著

南开大学出版社

天津

**图书在版编目(CIP)数据**

日语语法学研究新解 / 刘笑明著. —天津: 南开大学出版社, 2006. 9

ISBN 7-310-02556-3

I. 日... II. 刘... III. 日语—语法—研究  
IV. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 063672 号

**版权所有 侵权必究**

**南开大学出版社出版发行**

**出版人: 肖占鹏**

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

\*

河北省迁安万隆印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

\*

2006 年 9 月第 1 版 2006 年 9 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 11.125 印张 2 插页 315 千字

**定价: 25.00 元**

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

## 序

劉笑明氏は、1990年から2006年の間、実に12年に及ぶ日本での研究生生活を遂行し、その成果を本書に結実させた。初来日の時、すでに三十路半ばを過ぎて、単身、異国の地で過ごすことになった日々は、心身とも艱難辛苦のものがあつたこと想像に難くない。爾来、ひたすら日本語の文法研究に取り組む志を抛り所に、今日に至つたのである。

本書は、学位論文「日本語情意表現の記述的研究」を上梓したものである。情意表現は、いわゆるモダリティの表現の全体を指すもので、現代日本語文法研究の中心課題のひとつである。劉笑明氏は、外国人日本語研究者としての不利な条件をものともせず、最近までの先行研究を渉獵し、トピックごとに研究の到達点と問題点を明確にし、自己の新見を提示しようと奮闘して、文字通りの労作を成し遂げた。

同氏の研究成果について、まず評価すべきは、この領域における研究の体系化への志向という点である。情意表現について、形式上から無標の文と有標の文を対等の対象と措定し、意味上から感情・感覚、意志、希望、思考の四つの枠に分別して記述した。また、日本語文法研究において伝統的に論じられてきた命題とモダリティの関係について、従来の諸説を検討したうえで、述語の階層構造において、場合によって、諸要素は意味上、客観的表現から主観的表現への融通性をもつことを明らかにして、日本語の

文においてモダリティは「収縮・膨張性階層構造」をもつという新見を提示していることも注目される。

日本語のモダリティの研究には、もとより多くの研究者が参画しており、本書に参照された先行研究も優に三百を超している。著者もまた、本書に関わる 10 点の論考を公表してきた。本書は、上述したように、この領域における研究の体系化を志向したものであり、内外の読者諸賢の御高覧を願うものである。

おわりに、劉笑明氏が孜孜としてこの研究に取り組まれた歳月に敬意を表したい。同氏の瘦身で長身の体躯、柔和で笑みを絶やさないう表情から、これほどの粘り強さはむしろ意外の感すらする。私の知る岡山大学での 3 年間は、昼も夜も、夏も冬も、研究室にあって、文字通り、寸暇を惜しんで研究に勤しんでいた。早朝から深夜まで、同氏の勉励の姿には、周囲の教員や職員の感嘆のまなざしが注がれているように思われた。日本語の学問に従事する中国人学徒として、このうえない存在として、心より敬意を表し、今後の発展を祈念したい。

2006 年 3 月

吉 田 則 夫

## まえがき

本書は、2005 年 12 月に兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（岡山大学配属）に提出し、翌 2006 年 3 月に博士（学術）の学位を授与された学位論文「日本語情意表現の記述的研究」に若干の加筆訂正を加えたものである。

日本語文法研究において、情意表現の考察については長い間の主要な研究テーマである。話し手の情意的態度の言語的表現と文法形式として規定される情意表現の中で、「事柄めあての認識・判断」と「言語者めあての発話・伝達」の二つの段階が存在しており、特に情意的行為として後者に関わるものが種々存在し、それらの表現は文末で表出のモダリティとして機能するとき、非常に複雑で巧みな様相を呈することが分かる。情意表現はモダリティの中核として日本語文において最も代表的なものであり、文の構造においても重要な位置を占めている。

本書では、情意表現に関する包括的・体系的な把握のために、意味上から「感情・感覚」、「意志」、「希望」、「思考」の四つの枠に分け、形式上から情意用言述語という無標の文と文法形式をもつ有標の文に区別して考察した。さらに情意表現におけるモダリティの様相及び構文と関連する諸要素、成分を有機的に分析しかつ統一的に捉えて、情意表現の意味的・構文的な特徴を明らかにしようとした。日本語のモダリティ研究の領域が広がっていくことを望み、本書の考察が多少なりともそのきっかけになることを願っている。

留学中及び本書の執筆にあたっては、多くの方々のお世話にな

った。ここで謝辞を申し述べたい。

まず、本書のもとになった学位論文をご指導くださった主指導教員である岡山大学教授吉田則夫先生に心より感謝申し上げたい。吉田先生には、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（岡山大学配属）に進学して以来、身元保証人になっていただき、懇切なご指導と温かい励ましをいただいた。一般言語学的方法論に基づく文法カテゴリー、現代日本語の表現などを吉田先生に直接学ぶことができたことは、今後の私の研究人生においても、非常に重要な意味をもっていると思う。また、論文の構成や効果的なプレゼンテーションの仕方なども教えていただき、研究姿勢から論述の細部に至るまで、叱咤激励を賜った。本人でさえ読みにくい原稿でも、先生は常に丁寧に朱を入れてくださり、的確なご教示を与えていただいた。生活の面でも、風邪を引かないように、常に親切に面倒を見ていただいた。ある時、ビタミンが足りず、栄養不足のため、口内炎に罹り、偶々、吉田先生に大きく赤い林檎を三ついただいた。苦しい留学生活の中で新鮮で美味しい林檎を食べながら、感激で一杯であった。また、在学中、日本語学の見地から研究をご指導いただき、学位論文について貴重なコメントをいただいた、副指導教員の岡山大学教授稲田利徳先生、鳴門教育大学教授小野米一先生、原卓志先生にも、また、講義を通じてご指導いただいた世羅博昭先生と近藤勲先生にも、感謝申し上げたい。

博士論文提出後、吉田先生を主査に、稲田先生、菅原稔先生、堀江祐爾先生、高塚成信先生に審査していただき、貴重なコメントをいただいた。念願の学位記を手にすることができ、私費留学生としての長年の研究と生活には感慨深いものがある。

また、在学中、同じ研究室で過ごした先輩、現在、同志社大学講師谷口弘一氏と兵庫教育大学講師石橋由紀子氏には、常に励ましをいただき、また生活の面でいろいろとお世話になり、楽しく有意義な日々を送ることができた。

このほかに、今日に至るまでの長年の留学にわたって、研究生としての指導教員であった北海道教育大学教授高木重俊先生、夏井邦男先生、修士課程の指導教員であった北海道教育大学教授吉見孝夫先生、博士課程の指導教員であった北海道大学大学院教授石塚晴通先生、諸先生の方々より受けた学恩に感謝申し上げる。また大阪外国語大学の田野村忠温先生、神戸市外国語大学の益岡隆志先生、岡山大学の宮崎和人先生より有益な教示を賜った。

さらに振り返ると、1990年、最初の留学にあたっては、北海道苫小牧中央高等学校の校長であった故・山口光一先生が忘れがたい友人であった。当時、山口先生のお助けがなければ、日本への留学の願いを実現することはできなかったと思う。また、北海道の室野和行・文子ご夫妻をはじめ、池田富重氏、掛田正美氏、中沢幸子氏、山口祐正氏、中村旭氏、大森奈保光氏、大溝真弓氏、岩倉賢周氏、後藤健一氏、桜庭英昭氏、西村和郎氏、高山芳治氏、秋田県の田中実氏、東京都の望月宏毅氏、京都市の平津剛氏、神戸市の赤松靖子氏、西浦聖史氏の方々及び各位のご家族の皆様に心より感謝の意を表したい。滞在中、皆様には、一番困った時、生活の面や勉学の面で私を助けていただいた友人である。ご恩はいつまでも忘れない。

本書の出版に際しては、南開大学出版社の張華氏と張彤氏に多大なご尽力をいただいた。

以上のすべての方々には心より厚く御礼申し上げます。

最後に、私事ながら、私の成長を育み、早年にして逝った両親と、ずっと私を支えてくれた家族に、この場を借りて感謝の意を表し本書を捧げたい。

2006年早春 後樂園にて

劉 笑明



## 目 次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 序                  | 1  |
| まえがき               | 3  |
| 序 章                | 1  |
| 1 本研究の目的           | 1  |
| 2 情意表現の概念          | 2  |
| 3 研究の対象と方法         | 5  |
| 4 先行研究の素描と本研究の位置づけ | 7  |
| 5 資料と凡例            | 8  |
| 6 本論文の構成           | 9  |
| 第1章 文の構造と意味        | 12 |
| 1.1 はじめに           | 12 |
| 1.2 文の構造の新視点       | 14 |
| 1.2.1 先行研究         | 15 |
| 1.2.2 文の基本的構造      | 19 |
| 1.3 主語の優位性         | 24 |
| 1.4 まとめ            | 26 |
| 第2章 情意を表す用言の語彙的分類  | 28 |
| 2.1 はじめに           | 28 |
| 2.2 日本語の形容詞        | 28 |
| 2.2.1 先行研究の概観      | 29 |
| 2.2.2 情意形容詞の分類     | 33 |
| 2.3 日本語の動詞         | 38 |

|            |                         |           |
|------------|-------------------------|-----------|
| 2.3.1      | 先行研究の概観                 | 39        |
| 2.3.2      | 情意動詞の分類                 | 41        |
| 2.4        | まとめ                     | 46        |
| <b>第3章</b> | <b>情意表現におけるモダリティの体系</b> | <b>48</b> |
| 3.1        | はじめに                    | 48        |
| 3.2        | モダリティ論の先行研究             | 48        |
| 3.2.1      | モダリティ論の基盤形成             | 49        |
| 3.2.2      | モダリティ論の展開               | 52        |
| 3.2.2.1    | 叙法論としてのモダリティ論           | 52        |
| 3.2.2.2    | 階層的モダリティ論               | 53        |
| 3.3        | 先行研究の問題点                | 57        |
| 3.4        | モダリティにおける有標と無標の捉え方      | 58        |
| 3.5        | モダリティの規定                | 59        |
| 3.5.1      | 話し手の関わる文構成要素の二つの側面      | 59        |
| 3.5.2      | めあての違いによるモダリティの二種       | 60        |
| 3.6        | モダリティと共起要素の所在           | 62        |
| 3.7        | 述語形式のモダリティの体系           | 65        |
| 3.7.1      | 情意表現の語彙範疇と文法形式          | 65        |
| 3.7.2      | 表現類型                    | 66        |
| 3.7.3      | 文末形式                    | 67        |
| 3.8        | まとめ                     | 70        |
| <b>第4章</b> | <b>感情・感覚の意味規定とその表現</b>  | <b>73</b> |
| 4.1        | はじめに                    | 73        |
| 4.2        | 先行研究の概観                 | 74        |
| 4.3        | 感情用言の認定                 | 75        |
| 4.4        | 感情表現の諸相                 | 78        |
| 4.4.1      | 感情の主観性                  | 78        |
| 4.4.2      | 感情の客観性                  | 81        |
| 4.4.3      | 他のモダリティ形式との結合           | 87        |

---

|                            |            |
|----------------------------|------------|
| 4.5 感覚用言の認定                | 89         |
| 4.6 感覚表現の諸相                | 94         |
| 4.6.1 感覚の主観性               | 94         |
| 4.6.2 感覚の客観性               | 96         |
| 4.7 まとめ                    | 100        |
| <b>第5章 意志表現</b>            | <b>103</b> |
| 5.1 はじめに                   | 103        |
| 5.2 「する」形                  | 104        |
| 5.3 「(よ) う」形               | 105        |
| 5.4 「(よ) うとする」形            | 107        |
| 5.5 「つもりだ」形                | 110        |
| 5.6 「ことにする」形               | 114        |
| 5.7 まとめ                    | 117        |
| <b>第6章 希望表現</b>            | <b>119</b> |
| 6.1 はじめに                   | 119        |
| 6.2 先行研究の概観                | 119        |
| 6.3 希望表現の定義とカテゴリー          | 121        |
| 6.3.1 「たい」                 | 121        |
| 6.3.1.1 主体と話し手とが一致する文      | 122        |
| 6.3.1.2 主体と話し手とが一致しない文     | 129        |
| 6.3.2 「たがる」                | 135        |
| 6.3.2.1 主体と話し手とが一致する文      | 136        |
| 6.3.2.2 主体と話し手とが一致しない文     | 137        |
| 6.3.3 「てほしい」               | 139        |
| 6.3.3.1 行為の実行者と聞き手とが一致する文  | 139        |
| 6.3.3.2 行為の実行者と聞き手とが一致しない文 | 140        |
| 6.4 まとめ                    | 141        |

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| <b>第7章 「思う」表現の諸相</b> ..... | 144 |
| 7.1 はじめに.....              | 144 |
| 7.2 先行研究の概観.....           | 144 |
| 7.3 語彙の用法.....             | 146 |
| 7.4 文法的用法.....             | 149 |
| 7.4.1 表出文.....             | 149 |
| 7.4.2 判断文.....             | 153 |
| 7.5 「と思う」自体の様相.....        | 157 |
| 7.6 まとめ.....               | 162 |
| <b>第8章 モダリティの助動詞</b> ..... | 164 |
| 8.1 はじめに.....              | 164 |
| 8.2 「ものだ」と「ことだ」の意味・用法..... | 165 |
| 8.2.1 はじめに.....            | 165 |
| 8.2.2 モダリティ形式の捉え方.....     | 165 |
| 8.2.3 「ものだ」.....           | 167 |
| 8.2.4 「ことだ」.....           | 176 |
| 8.2.5 「ものだ」と「ことだ」との異同..... | 181 |
| 8.2.6 まとめ.....             | 182 |
| 8.3 「てしまう」とその表現上の心的側面..... | 183 |
| 8.3.1 はじめに.....            | 183 |
| 8.3.2 「てしまう」の意味.....       | 184 |
| 8.3.3 事態傾向の態度表明.....       | 187 |
| 8.3.3.1 話し手主体.....         | 187 |
| 8.3.3.2 他者主体.....          | 188 |
| 8.3.4 事態結果の態度表明.....       | 190 |
| 8.3.4.1 話し手主体.....         | 190 |
| 8.3.4.2 他者主体.....          | 192 |
| 8.3.5 他のモダリティとの結合.....     | 194 |
| 8.3.6 まとめ.....             | 196 |

---

|       |                           |     |
|-------|---------------------------|-----|
| 8.4   | 話し手の感情的困難とその表現            |     |
|       | —「づらい」「がたい」「かねる」をめぐって—    | 197 |
| 8.4.1 | はじめに                      | 197 |
| 8.4.2 | 「づらい」                     | 197 |
| 8.4.3 | 「がたい」                     | 201 |
| 8.4.4 | 「かねる」                     | 203 |
| 8.4.5 | 三つの形式の異同                  | 205 |
| 8.4.6 | まとめ                       | 211 |
| 8.5   | 事柄の構成関係から見た話し手の気持ち        |     |
|       | —「しまつだ」「ありさまだ」「せいだ」「おかげだ」 |     |
|       | 「にもほどがある」を中心に—            | 213 |
| 8.5.1 | はじめに                      | 213 |
| 8.5.2 | 「しまつだ」「ありさまだ」             | 213 |
| 8.5.3 | 「せいだ」「おかげだ」               | 218 |
| 8.5.4 | 「にもほどがある」                 | 221 |
| 8.5.5 | まとめ                       | 222 |
| 8.6   | 「べきだった」とその表現              | 223 |
| 8.6.1 | はじめに                      | 223 |
| 8.6.2 | 意味と用法                     | 223 |
| 8.6.3 | まとめ                       | 228 |
| 8.7   | 「ではないか」の意味・用法             | 229 |
| 8.7.1 | はじめに                      | 229 |
| 8.7.2 | 先行研究の概観                   | 229 |
| 8.7.3 | 「ではないか」の様相と形式認定           | 230 |
| 8.7.4 | 対話機能                      | 231 |
|       | 8.7.4.1 「事柄確認」の用法         | 231 |
|       | 8.7.4.2 「事柄認識」の用法         | 233 |
| 8.7.5 | 独話機能                      | 236 |
| 8.7.6 | 「のではないか」との関わり             | 238 |
| 8.7.7 | まとめ                       | 240 |

|             |                      |            |
|-------------|----------------------|------------|
| 8.8         | 第八章のまとめ              | 241        |
| <b>第9章</b>  | <b>情意表現から見た終助詞</b>   | <b>243</b> |
| 9.1         | はじめに                 | 243        |
| 9.2         | 先行研究の概観              | 243        |
| 9.3         | 情意を表す終助詞の諸相          | 245        |
| 9.3.1       | 考察の対象                | 245        |
| 9.3.1.1     | 感情系                  | 246        |
| 9.3.1.2     | 感動系                  | 251        |
| 9.3.1.3     | 願望系                  | 255        |
| 9.3.1.4     | 意志系                  | 256        |
| 9.4         | まとめ                  | 258        |
| <b>第10章</b> | <b>情意表現における副詞の働き</b> | <b>261</b> |
| 10.1        | はじめに                 | 261        |
| 10.2        | 副詞の概観                | 261        |
| 10.3        | 情態副詞との共起             | 263        |
| 10.4        | 程度副詞との共起             | 269        |
| 10.5        | 陳述副詞との共起・呼応          | 273        |
| 10.6        | まとめ                  | 277        |
| <b>第11章</b> | <b>取り立て助詞「でも」</b>    | <b>278</b> |
| 11.1        | はじめに                 | 278        |
| 11.2        | 「でも」の意味・用法           | 278        |
| 11.2.1      | 「名詞＋でも」              | 280        |
| 11.2.2      | 「疑問詞＋でも」             | 281        |
| 11.3        | まとめ                  | 283        |
| <b>第12章</b> | <b>モダリティの制限からの解放</b> | <b>285</b> |
| 12.1        | はじめに                 | 285        |
| 12.2        | 先行研究と問題点             | 286        |

## 目 次

---

|         |           |     |
|---------|-----------|-----|
| 12.3    | 状態性用言の認定  | 290 |
| 12.4    | 状態性用言の文機能 | 294 |
| 12.5    | まとめ       | 300 |
| 結 語     |           | 302 |
| 1       | 本研究のまとめ   | 302 |
| 2       | 今後の課題     | 306 |
| 用例出典と略称 |           | 307 |
| 参考文献    |           | 312 |
| 索引      |           | 331 |

## 序 章

### 1 本研究の目的

現代日本語の情意表現<sup>(注1)</sup>を対象にして、文末形式を中心にモダリティの観点から情意表現について分析・記述し、意味的、構文的な特徴を明らかにすることが本研究の目的である。

日本語文法の研究には、主に三つの流れ<sup>(注2)</sup>が見られるが、今日「日本語記述文法」が盛んに行われていると考えられる。これは日本語を対象として具体的な言語事実の考察を重視する文法研究である。本研究は記述文法<sup>(注3)</sup>の立場で日本語情意表現における意味と形式の相関に関する日本語母語話者の言語知識（表現、習慣など）を解明するということを目指す。情意表現は日本語学と日本語教育の分野において、比較的注目されている研究課題の一つであり、しかもモダリティの文法においても中核の問題であり、極めて重要な位置を占めていると考える。近年、情意表現が多くの学者によって盛んに論究されてきたが、単一の、個別的な研究<sup>(注4)</sup>が多く、情意表現に関する包括的・体系的なものはまだ十分にはできていないと言えよう。先行研究では、文において有標のものと無標のものは何か、どのような条件で主語に位置する主体がモダリティの制限<sup>(注5)</sup>から解放されるのか、という問題は明確には論じられず、また情意表現の範疇、形式、種類及びモダリティなどがどのように規定されるのか、決定的な結論は出ていない。例えば、

(1) わたしは車がほしい。

(教p201)



## (2) 学生は勤勉でありたい。

のように、用例(1)の「ほしい」という語は、文において命題に帰属するのか、モダリティに帰属するのか、また、希望を表す「たい」が平叙文の基本形で文末に使用されるとき、情意主体は主語の位置に立ち、一人称の話し手でなければならないという規則があるが、用例(2)はそうではなく、文としても成立する、という問題については、先行研究では解明されていないままである。

要するに、日本語研究の分野で未開拓の部分が少なくないように思われる。情意表現に関する包括的・体系的研究、または表現形式、構文機能の分析はまだ十分には行われていないといつてよい。文法研究には唯一絶対のものがあるわけではなく、様々な観点、方法による研究が相補いあって文法現象に対する認識が深化していくわけである。本論文は単に情意表現の意味と形態及び種類の認定だけでなく、何よりも重要なことは、モダリティが情意表現の研究の中にどのように位置づけられるかを明確にする。そのために、文の構造との関連においてモダリティになるものを究明することが必要となる。本研究では、従来の研究を捉えなおし、情意表現におけるモダリティの体系と構造を検討し、モダリティ形式、種類、範疇を考察し、そして実際の構文中の意味的特徴と文法機能进行分析・記述する。

## 2 情意表現の概念

人間の感情・感覚、意志、希望などを語るとき、心情、感じ、態度、情緒、気持ちなど、数多くの関連した表現があるが、言語表現との関係では、「情意」という用語<sup>(注6)</sup>が多く使用されている。情意とは、言語者(話し手)が事柄に対する発話態度または聞き手に対する主観的な働きかけなど、一般的に言語表現される情意的態度を意味すると考える。<sup>1)</sup>情報とともに伝えられるときに、話し手の気持ちや対人的な態度、つまり情意的態度を表すのである。ここで話し